

# 霊宝館だより

題字・畚野光義師



ちいさなほとけさま

## 利用案内

### 開館時間

■5月1日～10月31日

8時30分～17時30分

■11月1日～4月30日

8時30分～17時00分

■休館日 年未年始のみ

■拝観料 大人

600円

高・大学生 350円

小・中学生 250円

■専用駐車場あり

## 夏期特別展

### 「ちいさなほとけさま」

詳細は2～3頁をご覧ください

## 第95号 目次

夏期特別展のお知らせ	2～3
収蔵品の紹介69	4
高野山の名鐘 其の16	5
高野山の結界と女人禁制などのタブー	6～7
神は細部に宿る 第二章	8
霊宝館の庭園	9
愛染明王像修理完成報告	10～11
図録バックナンバー紹介	12

夏期特別展

「ちいさなほとけさま」

期間 7月17日(土)～9月26日(日)

小

ちいさな姿のほとけさま



重文 毘沙門天立像(胎内仏)

細

細かな文様で飾られたほとけさま



重文 孔雀明王坐像

ほとけさまのお姿は、我々と同じような大きさのときもあれば、非常にちいさな姿になれることもあります。我々衆生に合わせて大きさを覚えてくださるのです。本年度夏期特別展では「ちいさなほとけさま」と題し、「小・細・幼・若」というキーワードを設定し、高野山の様々なちいさなほとけさまを一堂に集めました。皆さんは「ちいさなほとけさま」にどのようなイメージを持たれるでしょうか？

主な出陳品

◆ 前期展示 7月17日～8月22日  
◆ 後期展示 8月23日～9月26日  
初 初出陳

絵画

- 国宝 伝船中湧現観音像
  - 重文 紅顔梨阿弥陀像
  - 重文 尊勝曼荼羅図
  - 重文 阿弥陀浄土曼荼羅図
  - 重文 当麻曼荼羅縁起
  - 重文 薬師十二神将像
  - 重文 高野大師行状図画巻第一
  - 重文 両界曼荼羅図(血曼荼羅)
  - 重文 九品曼荼羅図
- 竜光院 正智院 宝寿院 西禅院 清浄心院 桜池院 地藏院 金剛峯寺 清浄心院

彫刻

- 国宝 制多迦童子立像(八大童子立像の内)
  - 国宝 矜羯羅童子立像(八大童子立像の内)
  - 重文 板彫胎藏曼荼羅(乙面)
  - 重文 板彫両界曼荼羅(胎藏界)
  - 重文 木造浮彫九尊像
  - 重文 屏風本尊
- 金剛峯寺 金剛峯寺 金剛峯寺 金剛峯寺 金剛峯寺 竜光院



幼

幼い姿のほとけさま



国宝 矜羯羅童子立像（八大童子立像の内）

若

ほとけをめぐすころ



重文附 快慶作広目天像胎内納入文書



重文 高野大師行状図巻第一「出家受戒事」

- 重文 毘沙門天立像（胎内仏）
- 重文 十一面観音立像
- 重文 阿弥陀三尊立像
- 重文 孔雀明王坐像
- 重文 奥之院出土遺物の内金銅菩薩立像
- 重文 摩利支天・文殊菩薩嵌装舍利厨子
- 重文 金剛釈迦・観音・薬師三尊像
- 重文 金剛夜叉明王立像
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 五坊寂靜院
- 宝亀院
- 金剛峯寺

工芸

- 重文 銅梵釈四天王五鈷鈴（秘密灌頂道具の内）
- 竜光院

書跡

- 国宝 髻髻指帰（上巻）
- 重文 紺紙金字法華一品経
- 重文附 快慶作広目天像胎内納入文書
- 細字大般若経
- 細字法華経
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺
- 初
- 初
- 初

国宝三件、重要文化財十九件、初出陳品八件を含む、計五十九件を展示

ミュージアムトークのご案内

7月31日（土）・9月11日（土）  
午後2時～（1時間程度）

当館学芸員による展示解説を行います  
（事前申し込み不要）

秋期企画展のお知らせ

海を渡る名宝

—アジアの中の高野山

2010年10月 2日（土）  
～12月12日（日）

重要文化財

# 紺紙金字法華一品経（開結共）

## 28巻

平安時代 金剛峯寺

縦27・0 cm 全長63・9（993・6 cm）

（夏期特別展では提婆達多品第十二ほかを展示いたします。途中巻替えあり）

法華経は「妙法蓮華経」といい、  
八巻二十八品（二十八章）からなり  
ます。これを一品ずつ一巻に写した  
が国では古くから護国経典として重

視されました。高野山にも数多くの  
遺品が伝わっています。

本経で目をひくのは非常に豪華な  
装飾が施されている点です。表紙に  
は経題を浮彫りした金属板が付けら  
れ、題の周囲や八双（経巻の端部分）  
は金属製で、細かく草花の文様が彫  
り込まれています。軸首は水晶と金  
具でできています。経文は金字で書  
かれ、見返し部分には金銀泥で説法  
図など、各品の内容に関連するさら  
びやかな絵が描かれています。

表紙は見返し絵の荘厳さとはうっ  
て変わって、蓮華唐草文に蓮華から  
生まれ出たかのような裸の子供が各  
巻五人ずつ描かれています。肌は白  
く、頭は薄藍色の子供たちはそれぞ  
れ異なるポーズをとり、さまざま  
表情がほほえましい絵です。京都の

十念寺に「仏鬼軍繪巻」という室町  
時代の絵巻（重文）が伝わっていま  
すが、その中に地獄で苦しむ人々が  
仏の力により救済され、本経のよう  
に蓮華の上で合掌する子供に生まれ  
変わったようすが描かれています。  
本経の子供たちも法華経の功德によ  
って悟りへ導かれる人々をあらわし  
ているのかもしれませんが。

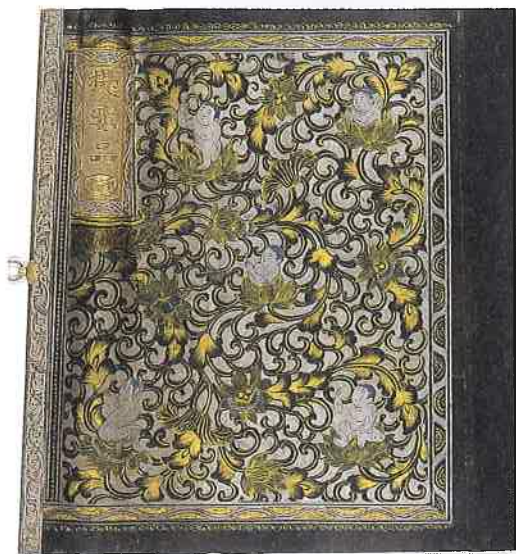
また本経は法華経二十八巻に開経  
の「無量義経」、結経の「観音賢経」  
を加えた「法華三部経」と呼ばれる  
三経構成で、本来は全三十巻あるも  
のです。天正十七年（一五八九）の  
修理銘によると以前は豊臣秀吉（一  
五三七〜一五九八）が所有していた  
ようで、当時は三十巻揃っていまし  
た。しかし現在は「如来寿量品」、  
「普門品」を欠くため二十八巻が伝  
わっています。欠品の行方は不明で  
したが、平成二十一年、兵庫県香  
雪美術館がこのうち「如来寿量品」  
を所蔵していることがわかりまし  
た。いつ、どのような経緯で高野山  
より流出し、香雪美術館収蔵に至っ  
たのかは不明ですが、「観音経」の  
名で知られる「普門品（観世音菩薩  
普門品）」もいつかどこかで発見さ  
れる日が望まれます。

（F）

### 収蔵品の紹介 69



（巻首）



（表紙部分）



連載

高野山の名鐘

其の16 光臺院の鐘



光臺院の現在の鐘



光臺院は「高野御室」とも称される由緒ある寺院です。鐘楼堂は山門をくぐった左手、本堂との間の木々に囲まれた山懐に静かに建っています。戦前には江戸の鋳物師が作った梵鐘が懸かっていました。先人の研究によると、銘文から、弘法大師八百五十年御遠忌にあたり、天和四年（一六八四）二月十五日に江戸の鋳物師である宇田川藤四郎藤原次重によって作られたことが分かります。

宇田川藤四郎藤原次重の作った最初の作品として知られるものは、慶安二年（一六四九）鎌倉禪興寺（明治元年の廃仏毀釈で廃寺となる）の鐘で、最後のものは貞享三年（一六八六）武蔵豊島郡寺嶋郷法泉寺（東京都墨田区東向島の法泉寺か？）の鐘といえますので、光臺院の鐘は晩年の作でした。またその鐘は、高野山の梵鐘の中では唯一の江戸の鋳物師の作といわれ、大変貴重なものであ

ったと思われます。しかしながら、この鐘は戦時中の金属供出で光臺院の本堂の前の燈籠ともども失われてしまいました。

鐘が金属供出で失われた後、鐘楼堂には半鐘が懸けられていましたが、先代楠公誠師とそのご母堂のご尽力により、平成二十一年にようやく

現在の鐘が完成しました。高さ約一メートル、直径六十センチ、二箇所

の撞座の上にはそれぞれ「南無阿弥陀佛」「南無大師遍照金剛」とあり、側面には「**カ**（ア）」「**キ**（バン）」

「**キ**（キリク）」の梵字と「平成二十一年十一月吉日／高野御室／光臺院／公誠代」と記されています。「南無大師遍照金剛」の字は弘法大師の字からとったもので、「南無阿弥陀佛」と梵字は楠公誠師の筆です。

鐘の内側には「鑄匠京都 岩澤徹誠」と作者が記されています。余談ですが、この京都の「岩澤の梵鐘株式会社」は熊本県の蓮花院誕生寺の世界一大きな梵鐘を作った会社です。現在の梵鐘が出来る前に懸けられていた半鐘は、現在は光臺院本堂の横に懸けられています。高さ約六十センチ、直径三十九・五センチで、二箇所



本堂横に懸けられた半鐘

の文字、側面に「越之中州高岡住／藤多万四郎／（途中不読）／寶曆第七丑年四月 日」との銘文が読み取れますが、その間の文は読むことが出来ません。恐らく「藤多万四郎」は施主の名前かと思われます。「寶曆第七丑年」は一七五七年です。

ご紹介した光臺院の三つの鐘には全て南無阿弥陀佛の文字が刻まれています。光臺院の本尊である阿弥陀三尊像は、快慶の作で、重要文化財に指定されています。後鳥羽上皇の第二皇子である御室道助法親王の念持仏として伝えられる、美しい阿弥陀三尊像です。 (K)

戦前の鐘の銘文

南無阿弥陀佛／高野大師八百五十年忌於／光臺院為供養武州江／府ニテ鑄立之云々／光臺院木食願意第八世／施主／木食義高上人／天和四年／甲子二月十五日／鋳物師武州江住／宇田川藤四郎／藤原次重

## 高野山の文化

## 高野山の結界と女人禁制などのタブー

前奥之院維那 日野西 眞定

## (一) 五来重先生の大学での講義

この終戦の日を境にして、五来先生の講義は一変した。この変化は、どの大学でも、特に日本史の先生に共通した課題であった。私は、先生に日本・東洋・西洋の三史の他に、北畠親房（一一九三～一三五四）の『神皇正統記』の講義を受けたと記憶している。

高野山大学の記録によると、昭和十五年～十七年まで、「日本史・東洋史・西洋史」とあり、学部では十七年～十八年に「日本精神史」とある。これを見ると、先生は文部省の方針に従って講義をされている。

私がみるどころ、先生の講義はこの日を境にして、全く民俗学的傾向のものとなった。それと同時に、御自身も、軍隊用の「どた靴」をはき、その上にゲートルを巻き、調査用具をリュックサックに入れてかつぐという姿で、盛んに花園村方面に、昔ながらの山道を

歩いて行かれた。私は、先生にお世話になったこともあり、よく独身の先生の大学の社宅に行き、風呂を沸かして上げたりした。また食糧難なので、先生とともに近辺の農家に野菜を買い出しに行ったりした。

私は昭和二十六年九月、仏教学科を卒業し、但馬の自坊に帰り、檀務をつとめ、時間があれば読書をし、高野山に関することを書いていた。しかし、かたしどうしても専門の研究者になりたいたと願望するようになり、その頃は大学に移り、同学の日本史の主任をされていた先生のもとで学びたい、との高野山大学学長の中野義照先生にお願いをした。先生も、日頃私の書いていたことを御覧になっていただけえ、もし大谷大学の方で引き受けてくれるのならよい、と申して下さった。早速、大谷大学の大学院文学研究科を

受験し合格したので、高野山大学の内地留学生として、学ばせていただくことになった。

当時、先生は日本修験道史の研究に没頭されていた。現在、日本山岳修験学会の会長は慶應義塾大学名誉教授宮家準先生であるが、第二代目で、初代は五来先生であり、その基礎を築かれたのである。

## (二) 高野山の結界と女人禁制などのタブー

この問題は、弘法大師空海が、高野山に金剛峯寺を建立した時の根本となる問題であるが、これを正當に解明出来るのは、五来先生の主張される「仏教民俗学」の研究方法しかないと思うのである。

## (ア) 高野山の開山と結界

『性霊集』（巻第九）の「上表文」によると、弘法大師空海は、弘仁七年

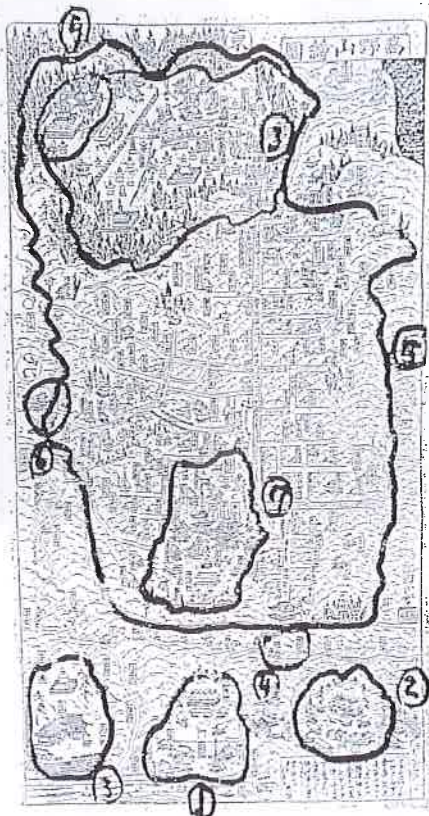
私の生涯の恩人は、師匠の金山穆留師であり、天徳院で加行を指導して下され、僧侶の道に入ることが出来た。学問上では五来重先生、さらに学者の世界に入る道を開いて下さった中野義照先生の合わせて三人である。心から感謝をさせていただいている次第である。

(八一六) 六月、真言密教の根本道場を建立するために、高野山を賜うことを嵯峨天皇に願ひ出、同年七月に許可をされた（『御手印縁起』「太政官符案」）。翌八年高野山で二回結界を行っている。これは同じく『性霊集』（巻第九）にあるが、「高野建立の初結界の時の啓白文」（岩波古典文学大系本による。以下全て同じ）と「高野に壇場を建立する啓白文」である。この弘法大師空海の文章に対する「題」は、



高野山古絵図

- ⑨ 御 廟
- ⑧ 奥之院
  - 一の橋
  - 中の橋
  - 御廟橋(無明橋)
- ⑦ 壇 上
  - 御影堂
  - 三鉢の松
  - 大塔
  - 金堂
- ⑥ 一心口
  - 女人堂
- ⑤ 結界(道)
  - (女人道)
- ④ 結界石
  - 袈裟掛石
  - 捻石
  - 押上石
- ③ 学文路
  - 刈萱堂
  - (玉屋・千里御前)
- ② 天野社
  - (地主神)
- ① 九度山慈尊院
  - (大師母公廟)



高野山全山及び周辺の絵図(高野山絵図)  
江戸時代 寛政 12年 高野山持明院蔵 60×35 cm

『性霊集』を編纂する時に、編纂者によって付けられたもので、弘法大師空海自身が付けたものではないといわれている。

とにかく、弘法大師空海は、高野山全体と、その中核に自分の信じる密教の堂塔伽藍を建立するための「壇場(壇上とも)」に対して結界の法を行っている。その文章は、

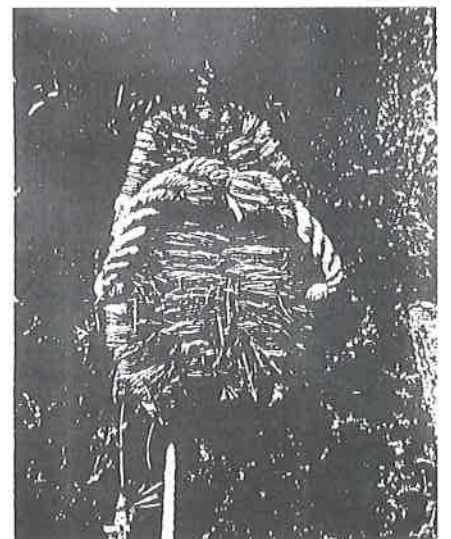
所有東西四維上下七里の中の一  
切の悪鬼神等は、皆我が結界を出で去れ。

この「悪鬼神」とは、中村元の『仏教語大辞典』によると、「目に見えない

い超人的神秘力を有するもの。善神と悪神とがあるが、特に害を与える低級な神々をいう」とある。この「害を与える低級な神々」を聖なる結界内から追い払ったのである。ここで私が中村元の『仏教語大辞典』を引くのは、この辞典は本来の立場から用語を解明してくれているからである。ただし、その仏教用語が、日本ではどの様に使われたかは調査はしていない。その場合には、『密教大辞典』等に依らなければならぬ。

もう一点取り上げておかなければならないことは、高野山の女人禁制などのタブーについては記述も多く、霊山

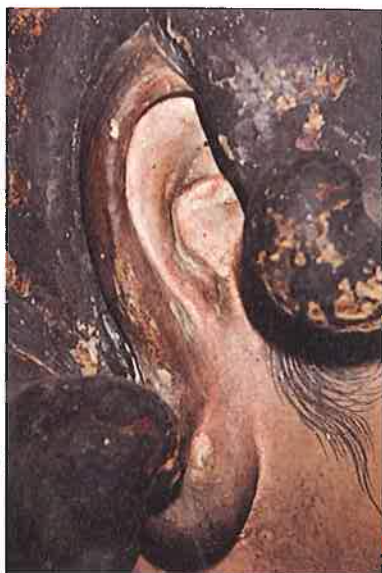
の中でも有名なことであるのに、弘法大師空海の著作には全く記されていないことである。弘法大師空海が庶民信仰に関心を持たれていたことは、私自身が一九七八年(昭和五十二年)三月一日の『歴史手帳』で発表した「但馬の塞の神に草鞋をあげる儀式」に触れている。私の自坊がある兵庫県豊岡市田結に、村境を守る塞の神があり、この神に昔は旅に出る時に草鞋を供える風習があった。この習俗は古く、弘法大師空海の時代にも行われており、御自著『三教指帰』巻の下、「假名乙兒論」に、「道神の履を著いて」とある。道神とは、村境を守る道祖神のことで、この神に弘法大師空海の時代でも、旅に出る時には草鞋を供える習慣があったのである。このことは、今ではほとんど見られなくなったが、正月の神送り、村境に草鞋を供える行事は、少しであるが残っている。その一つに、兵庫県養父市関宮では、地区民がわずかずつ藁を持ち寄り、かかどが欠けた長さ四メートルほどの大草鞋を、片方だけ作り、一本の太い竹に結びつけ道端の山際に添えて立てる。正月の神さんは片足だからそれで良いという。



道端に立てられた大草鞋(兵庫県養父市関宮)

よく、寺の門に、大きな草鞋が奉納されていることがある。二足がそろっている場合が多いようである。門は聖なる寺の入口であり、外界との境に当たる場でもある。そこに、道祖神に供えた草鞋の習俗が、今でも生きて行われているのを興味深く思うのである。

そのような民俗信仰に関心のある弘法大師空海が、女人禁制などのタブーについて一言も触れておられないことに注目して置く必要があると考える。比叡山に延暦寺を建立した最澄も、宮家準氏の教示によると、延暦寺の女人禁制について、一言触れた文があるだけの由である。これに対し、日本の山岳霊場がどの山にも、もれなく女人禁制などのタブーが厳しく行われていたことに疑問を持つ必要があると考えるのである。



運慶作 矜羯羅童子立像 右耳



快慶作 孔雀明王坐像 右耳



快慶作 広目天立像 右耳

## コラム

## 「神は細部に宿る」(God is in details) 第二章

今回は、「神は細部に宿る」という言葉と、仏像の作者特定の方法についてでしたが、今回はその話の続きです。作風だけでは分類出来ない仏像があった場合どうするのか、その方法についてお話ししましょう。

その方法とは「耳の比較」です。仏像の耳の形を細かく比べるというものです。「耳を比べて何が分かるの?」と思う方も居られるのではないのでしょうか。ですが、耳を比較することで仏像の作者が特定出来るのです。

次に例を挙げましょう。鎌倉時代の高名な仏師に、金剛峯寺四天王像や同じく孔雀明王像を造った快慶がいま

す。快慶は生涯でとても沢山の仏像を造り、多くが現存しています。そこで、快慶が造った仏像の耳の形を細かく比べていくと、年代や像の種類によって多少の違いこそあれ、大体が同じような形であることが分かりました。つまりは快慶独特の耳の形があり、耳の形を詳細に比較していくと、その仏像が快慶の作であるのかどうかを判断出来るというのです。上の写真を見て下さい。運慶と快慶では形が違ってきます。運慶同士で比べると、尊格が違うので全体の印象は違いますが、基本的な構成はほぼ同じだということがお分かり頂けるでしょうか? この方法は高い効果を上げ、今まで快慶だと思われていた像が実は違っていたり、快慶かどうか確定されていなかった像が快慶の作だとされることが多くなりました。それ以来、仏像の作者を判断する場合、耳の比較が仏像研究の世界では多く行われています。

実はこの「耳の比較」という方法は、元々は西洋美術の世界で編み出され、行われていた方法なのです。

では、何故このような方法が編み出されたのでしょうか。次にその背景をご紹介しますと思います。

ヨーロッパでは昔から有名作家の芸術作品を所有することが、貴族や富裕層にとっては一種のステータスや権力の象徴になっていました。当然、美術品の売り買いも多く行われ、中でも絵画の取引は多かったです。それにともなって、必然なのか、悲しいかな有名画家の絵の偽物を作って売る、贋作商売が横行するようになりました。そんな世界において、絵画を売り買いするには「目利き」である必要があります。しかし、目利きであっても一見しただけでは全く判別できないほど精巧な偽物が多く、間違ふこともしばしばで大損する美術商や富豪が居ました。目利きは商売、収集の世界だけでなく美術研究の世界でも重要でした。そこで、イタリア人のジョバンニ・モレルリという人が新たな鑑定法を編み出すのですが、これはまた次回にお話ししましょう。(T)



霊宝館の庭園

# ホオノキ・朴・保宝我之波・朴柏

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

高野山では、六月に入って、ようやくホオノキの葉が成葉となり、枝先に遠目には白色、近くで観ると淡黄色を帯びた大きな白花が、どれも空に向かって開花をはじめます。



花(木の蓮)

この木はモクレン科・モクレン属の落葉高木、樹高は二十メートル、幹周二メートルを越えるものもあります。高野山に自生する樹木のうち単葉としては最も大きな葉を枝の先の方に輪状に互生します。

花も葉も大きなつくりの木、大の木、花は四面八方に芳香を放散するので、芳香の木、放の木も和名の由来では、と思いたくなる木です。

同科・同属の庭木などとして植栽され、春、葉に先立って紫色の花をつける中国原産のモクレン(別名・シモクレン)に木蓮の字があてられていますが、花や

八峯の一峯しらみ朴咲けり

有昭

蕾みの様

(容) 態や

雰囲気な

ど、高野山では木の蓮、山の蓮はホオノキにピッタリです。山上に遺されている自然林の植生から、弘法大師が開創に着手された当時は、現在より、はるかに多くのこの木の蓮が花をつけていたと思われれます。

花の終わった後、大きな葉は梅雨に水分を、たっぷりと吸収して表面の緑を深くし、夏の風に、白い葉裏をみせ、さわざわとそよめく様は涼しげで心身を癒してくれます。

現存する日本最古の歌集・万葉集に「遠い天皇の祖先の御代御代に保宝我之波の葉を折って酒を飲んだという」と、大伴家持によって詠まれているように古くから保保加志波、朴葉木、朴柏などとも書き呼ばれて日常生活、民俗行事、宗教行事など



葉と幹

で食品を包み、盛り、つぎそそぐために、この大きな生葉や落ち葉が用いられてきたようです。現在も使われ、この木には、通常、朴の字があらわれています。

幹材は硯箱、膳、茶棚、舞楽・能の面の木地や刀の鞘などに。学生の朴歯下駄材、児童・生徒の版画彫刻用板としても親しまれてきました。

高野山や周辺の地域では子供がスツと伸びた若枝を採り強く振り樹皮と材を分離してぬきとり、材を刀身、樹皮の筒を鞘として遊んだことによる、かたなぎという呼び名もあつたそうです。

厚朴の字があてられていることもありすが、正しくは和厚朴、漢方では樹皮や果実を利尿、腹痛、喘咳などに用いられるといわれています。

重要文化財

絹本着色愛染明王像 (金剛峯寺)

保存修理事業完成



修理後  
本紙：縦194.4cm 横111.3cm  
表具：縦299.0cm 横134.6cm



修理前  
本紙：縦193.4cm 横111.2cm  
表具：縦283.6cm 横135.0cm

修理事業概要

工期：自 平成19年7月18日

至 平成22年3月31日

施工者：株式会社岡墨光堂

(京都国立博物館

文化財保存修理所第3修理室)

修理費用：全体経費 ￥18,754,250

国庫補助 ￥10,314,000

県費補助 ￥1,054,000

町費補助 ￥168,000

重要文化財絹本着色愛染明王像(金剛峯寺)の保存修理が、平成十九年～二十一年度の三年計画で、文化財保存修理所内岡墨光堂において行われてきました。このほど予定どおり完成し、四月五日に高野山に戻って参りました。それに伴い、四月二十九日～五月九日まで特別公開を行い、たくさんの方にご覧いただきました。なお、公開に先立ち、懇ろに開眼供養を行いました(写真)。







写真② 修理後  
もとの位置に戻された矢尻



写真① 修理前  
矢尻が見あたりません

《修理内容》

絵具の剥落止めと、クリーニングを全面的に行いました。また、江戸時代以前の修理の際に補われた絹を、全て取り除きました。取り除いた部分には、電子線を当てて人工的に劣化させた絹を裏面からあて、周囲の色を基準とした彩色を施しました。裏打紙も打ち替え、表装や軸首、保存箱も新調しました。

《特記事項》

I 修理前は、愛染明王が頭上につがえた弓矢の矢尻が欠失していました(写真①)。今回の修理で、弓矢が描かれた断片が、別の箇所を表裏逆に着していたのが見つかり、もとの位置に戻しました(写真②)。

同様に、弓矢周辺部分の断片も、本来の位置から移動していたものも、もとへ戻す作業を行いました。

II 旧表装から、江戸時代における過去二度の修理記録が確認されました。これによると、前回の修理は、享保二十一年(一七三六)、前々回の修理は元和六年(一六二〇)でした。享保の

修理記録は、総裏紙に記されており、元和の修理記録は、上巻き絹を切り取ったものが総裏紙に貼り付けられていました(写真③)。

元和の修理記録(青色部分)をみると、本像は当時、御影堂の宝物で、弘法大師の真筆と伝えられていたようです。さらに第二二五世寺務檢校法印となつた俊圭(一六二四年卒)が修理を行ったことがわかります。

また、享保の修理記録には、金堂の勸金によって修復したとあります。金堂は、寛永七年(一六三〇)に大塔が落雷炎上すると、類焼で灰燼に帰します。その後、時を経て享保十二年(一

七二七)によりやく再建の勅許があり、元文元年(享保二十一年、一七三六)六月に落慶供養が行われました。本像の修理が完成したのは同年五月一日、つまり再建された金堂の竣工直前で、修理にはその建設費の一部があてられたのです。

こうしてみると、多くの人がそれぞれ思いをこめ、折あるごとに本像を修復し、現在まで大切に守り伝えてきたことがわかります。今回の修理により、さらに良い状態で後世に残すことができそうです。

高野山金剛峯寺御影堂什物 弘法大師御真筆也  
奉為 天長地久御願不退満山安全佛法紹隆焉 是時元和六年五月廿一日

表具修復西院心王院前左学頭法印權大僧都俊圭(素明)年預之時矣  
表具師谷上吉本坊

享保廿一(丙辰)天五月朔日以金堂勸金修復焉

惣奉行 金剛頂院湛淵 表具師辻守兵衛  
高祖院宥永



写真③ 元和と享保の修理記録

# 霊宝館図録バックナンバー その2

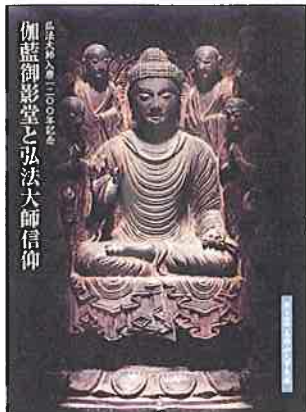
好評発売中です。  
購入は霊宝館ホームページまたは0736(56)2029まで



北海道展  
『空海マンダラ 弘法大師と高野山』  
二〇〇六年 二〇六頁  
北海道旭川・札幌にて開催された展覧会図録。



弘法大師入唐二〇〇年記念  
『空海と高野山』  
二〇〇三年 三五〇頁  
全国四会場で開催された大規模展。写真・解説共充実の一冊。



第24回大宝蔵展  
『伽藍御影堂と弘法大師信仰』  
二〇〇三年 八三頁  
霊宝館開設まで多くの宝物を納めていた御影堂に由来する品々。



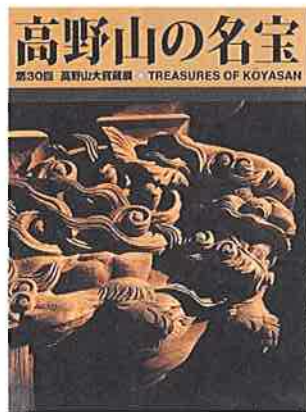
第23回大宝蔵展  
『高野山の信仰と子院の秘宝』  
二〇〇二年 一八七頁  
高野山の塔頭寺院に伝わる至宝の数々を紹介。お市の方像掲載。



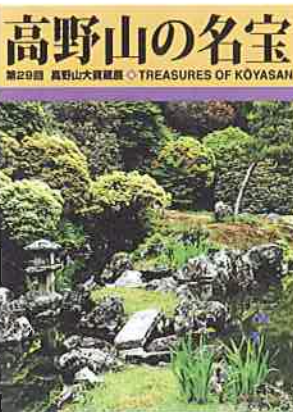
第26回大宝蔵展  
『密教曼荼羅・コスモスの世界』  
二〇〇五年 四一頁  
両界曼荼羅をはじめ、さまざまな種類の曼荼羅を紹介。



第25回大宝蔵展  
『高野浄土への憧れ』  
二〇〇四年 二〇三頁  
世界遺産登録記念展。他に類を見ない豪華な展示内容でした。



第30回大宝蔵展  
『高野山の名宝』  
二〇〇九年 四九頁  
高野山内寺院の内、三三箇院の沿革と名宝を紹介。庭園写真も。



第29回大宝蔵展  
『高野山の名宝』  
二〇〇八年 四一頁  
高野山内寺院の内、一八箇院の沿革と名宝を紹介。庭園写真も。



第28回大宝蔵展  
『信仰マンダラの世界 高野山―神仏への祈り―』  
二〇〇七年 四一頁  
高野山信仰の多様性を紹介。

(第27回大宝蔵展図録「高野山の名宝」は完売いたしました。)